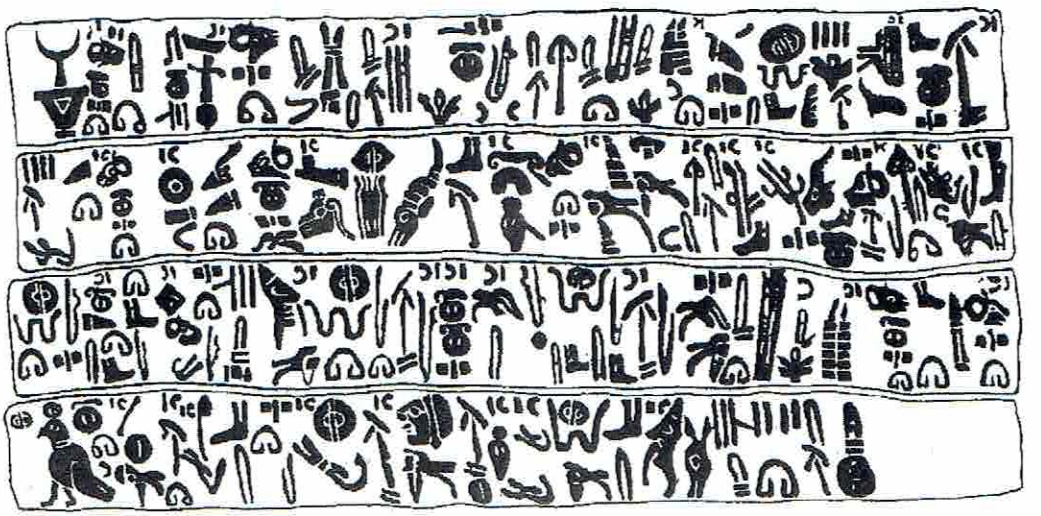
1928 年創刊　　1952 年第 2 次創刊

Rômazi no Nippon

・・・・・Kôeki zaidan hôzin・Nippon-no-Rômazi-Sya・kikansi・・・・・

dai 675 gô　　**2023.10**



Midasi

ジョアン・ロドリゲス『日本大文典』のローマ字つづり …… Baba Ryozi 2
漢字の記憶法、16 世紀にさかのぼる
　在華宣教師マテオ・リッチの場合 …… 小川　誉子美 6
斎藤秀一とローマ字運動
　1930 年代の歴史のなかから …… Hagiwara Yôko 10
旧中込学校（長野県佐久市）所蔵の国語
　ローマ字教科書等（戦後版）について …… 大橋　敦夫 16
伝統文法の「自他」が現代の自動詞 / 他動詞
　の概念に残したもの …… 井田　尚美 20
もう一つの「らしい」に寄せて …… Hamada Morio 24
東京裁判日本人弁護人の見た日本語表記 …… Takatori Yuki 28
Kanzi kana maziri bun o saki ni kaite
　mo yoi de wa nai ka …… Iwase Zyun'iti 30
新刊紹介『開国前夜、日欧をつないだのは漢字だった
　—東西交流と日本語との出会い』 …… 小川　誉子美 31
Katarai no Heya …… 34

表紙の文字　ヒッタイト象形文字（カルケミシュ碑文　前 9 世紀）
『世界の文字の図典』（吉川弘文館）から

漢字の記憶法、16 世紀にさかのぼる

在華宣教師マテオ・リッチの場合

小川　誉子美

1. 2500 年前から続く記憶法

進学や資格取得をはじめ、記憶力の強化が大きな強みとなる場面がある。そんなとき、記憶力を向上させたい、覚えたことを忘れないようにしたいと効果的な記憶法を求めて書物を紐解いた経験はないだろうか。

記憶法への関心は古くからあり、すでに紀元前 5 世紀ごろの古代ギリシャで効果的な記憶法の「発見」があった。その後、記憶法の開発が教育カリキュラムに取り込まれ、中世には未知の言語の学習にも活用されていた。驚くことに、当時の西洋人の中には、記憶法を駆使し漢字を学び偉業を成し遂げた者がいたのである。本稿では、その記憶法とはどのようなものだったのか、それを駆使した漢字学習について紹介する。

2. リッチ、ローマ学院で学び中国で応用

その記憶法とはイエズス会宣教師マテオ・リッチが用いた位置付け記憶法と呼ばれるものである。リッチは、アメリカの雑誌『ライフ』に第二千年紀（1000～1999 年）のもっとも偉大な百人の一人に選ばれた人物であり、世界地図である『坤輿万国全図』（1602）、ユークリッド幾何学の漢訳『幾何原本』（1607）で知られるが、実は、初めて四書を読破した西洋人でもあった。彼は、巡察使アレサンドロ・ヴァリニャーノの指示を受け、1582 年にマカオに入り、翌年中国に入境、やがて中国語官話を習得し、12 年後の 1594 年には四書を読破しラテン語訳を始めたという経歴を持つ。中国語の根幹である漢字の習得に役に立ったのが、イエズス会が設立したローマ学院で学んだ記憶法であったという。これは、修辞学と倫理学の授業の基礎課程に組み込まれていた。ちなみに、1590 年当時、イエズス会の司祭たちは 27 の言語に対応できた。1570 年代にすでにローマのイエズス会学院は各図書館に充実した外国語書籍が並んでいたこと、当時外国語用の活字フォントまで持っていたことから、イエズス会宣教師たちが任地に赴く前から布教地で未知の言語を習うための素地は準備されていたと思われる。

さて、リッチはこの記憶法を駆使して、400 字から 500 字も並んだ漢字を瞬時に記憶してしまったというが、その記憶法とはどのようなものだったのだろうか。

ボローニャ大学で学んだドミニコ会のホストフォン・ロンベルヒ（1480～1532）は、『記憶術集成』（1533,ヴェネチア）を刊行し、その中で、記憶用の都市や建物それぞれの中に記憶を分類し保存するという位置付け法を提唱、「記憶用視覚的アルファベット」も開発した。一方、人間の記憶力を高めることに関心のある医師グリエルモ・グレタローリは、だれでも決して忘れることのない鮮やかな記憶イメージがあることに注目し、場所、物体、人物の三要素から連続動作を作り上げ、その内容を忘れずにいられる記憶法を開発した。こうした記憶法を身につけ、在華宣教師として嘱望されていたリッチは、中国に対する情熱を持って、中国語の学習に取り組んだ。J.D.スペンスは、リッチが中国語で初めて

四書を読むという成功を収めることができた要因の一つとして、彼の非凡な記憶法を指摘している。リッチは当初中国語に対しどのような認識を持っていたのだろうか。マカオに到着した翌年の1583年2月、かつての修辞学の教師フォルナーリ宛に送った書簡には次のようにしたためられている。

> 最近私は中国語の勉強に没頭しています。ギリシャ語とドイツ語ともかなり違った言語であることは保証いたします。話すには実に曖昧な言語で、一語で1000以上もの意味があることさえ少なくありません。（略）文字について言えば、私のように実際に目にして使った経験がなければ、とても信じられないでしょう。中国人は、言葉や事物と同じ数だけの文字を持っているのです。そのため、文字の数は七万字以上にものぼり、一字一字がかなり異なった複雑な形をしているわけです。
>
> J.D.スペンス（1995）

リッチがかつてインドで教えていたギリシャ語は、単数・複数の区別や性による変化、冠詞や格変化や直説法や接続法など複雑な文法規則を持つため教えるのに苦労したが、今度は自らが中国語を学ぶにあたり、表意文字の複雑さとその数に圧倒されたのである。そこで、ローマ学院で学んだ記憶法を駆使し、中国語文を構成する個々の漢字を一連のイメージとしてとらえて、記憶用イメージに置き換えていったのである。得意な記憶術を活用しながら未知の言語に挑戦するのは、楽しかったに違いない。

とはいえ、膨大な量の漢字の形と意味、読み方を憶えることから始めなければならないわけで、困難を伴う作業であったことは間違いない。有能な教師の協力と上長からの励ましによりようやく挫折を乗り越えて、初心を貫き四書を読破したのである。その喜びは、マカオの上長宛ての書簡に次のように表現されている。

> その席上、ちょっとした事件が起こり、私は彼らの間ばかりか、知識人たち全員の間で大きな評判になりました。私が大多数の漢字について位置付け記憶法を作り上げていたことが話題を呼んだのです。（略）私は一枚の紙にどんな書き方でも良いから 何の順序もなしに漢字をたくさん書き並べて欲しいと言いました。一度だけ目を通せば、私は描かれた通りの順序で暗唱して見せることができるからです。中国人は実際にでたらめな順序で多数の漢字を書きました。そこで私は、一度それに目を通しただけで、全ての漢字を書かれた順序のままに暗証して見せました。一字も間違えなかったので中国人たちはこぞって驚きの声をあげました。彼らにとっても、とてつもないことのように思われたのです。私は彼らをさらに驚かせてやろうと、今度は並べられた漢字を逆の順序で暗唱してみせました。最後の字から始めて、最初の字までさかのぼっていったわけです。すると、中国人全員が肝をつぶし、まるで正気を失ったようになりました。私の名声はすぐさま知識人たちの間に広まりました。私のところにやってきてこの記憶の科学を伝授してもらいたいと頼んだり、私を教師に迎えたいと言ったりする者もいれば、私を師と仰いで敬意を払ったり、教師に払うのと同じ額の金を差し出したりする者もいるというありさまでした。（略）いつの日かきちんと定住して家も構えた暁には、彼らの要望に応えるべく努力するつもりです。なぜなら、事実、この位置付け記憶法は漢字のために発明されたと言っても過言ではないからです。漢字はそれぞれの字が一つの事物を意味する図形であるため、位置付け記憶法が殊に有効で存分に威力を発揮します。（1595年マカオの上長ドゥアンテ・デ・サンデ宛）
>
> J.D.スペンス（前掲書）

リッチは、このように位置づけ記憶法が漢字の記憶に効果的に働いたと繰り返し述べているのである。この書簡が中国布教の

準備の成果を上長に伝えるための報告であるという点を差し引いて判断するべきであろう。しかし、たとえそうであっても、彼の喜びは言葉に尽くせないものであったろうこと、また、四書を暗記し、科挙に臨み、官職を狙う中国人の若者たちがどのような反応を示したのか、そして、リッチの記憶力に感銘をうけた中国の文人たちが、ヨーロッパ文化に関心を持ち、やがては、彼らの布教活動に耳を傾けるようになっていったであろうことは想像に難くない。

外国人の入境や布教を禁じていた中国において、リッチはキリスト教を説きに来たのではなく、西洋から中国の聖賢の教えを学びに来たと低姿勢を示し、滞在を許可されたが、その言葉どおり、西洋人ではじめて四書を読めるようになった。その背景には、若い時に身に着けた記憶法が多いに役立ったのである。入境後2年あまりで中国語が話せるようにはなったが、書物を読みこなせる域に到達するにはさらに年月が必要だった。四書が読破できたのは、マカオに到着してから12年後のことであった。

3．位置づけ記憶法と漢字学習

リッチの漢字の記憶法とはどのようなものだったのだろうか。はじめに、彼が学んだロンベルヒの記憶術とは、紀元前に古代ギリシャで発明されたという「場所法」に由来するものである。これはギリシャの詩人シモニデスに発するものとして、リッチは次のように説明している。

詩人シモニデスは宮殿で催された酒宴に招かれた。宴会は大勢の客でにぎわっていたが、彼が席を外した途端、激しい風が吹き付け、大広間が崩れ落ちてしまった。彼以外の客は天井の下敷きになって亡くなったが、遺体が激しく破損し判別できなかった。ところが、シモニデスは出席者の座っていた位置を正確に覚えていたことから遺体の位置を元に身元が特定できたという。

この伝説から、場所とリンクした情報は記憶しやすいということが後世に伝えられ、何世紀もかけて一つの体系に仕上げられていった。有名な演説家たちが「場所法」を用いて演説内容を記憶し、資料を見ずに長時間の演説を行い聴衆の信頼を得ていったのである。

「場所法」は、やがて位置づけ法として記憶法の一つとして体系化されるが、リッチは、これをどのように漢字の記憶に用いたのだろうか。彼は、明の士大夫ら知識人に向けて西洋の記憶術を紹介する書『西国記法』を漢文で記した。鶴ケ谷（2019）によると、漢字から喚起されるイメージを組み合わせて、印象的な画像を作り上げ、それを記憶術の手法によって脳裏に刻み付ける。その際、意外な組み合わせほど印象を強められるという。この記憶術では、物や事柄を画像として、順次それぞれの場所に安置する、つまり、画像のイメージを脳裏に設定した記憶の場に配置するのである。その際、意外と思われる組み合わせほど印象を強められると考えた。具体的には、「武」「要」「利」「好」の四文字を憶える場合、これを一つの部屋の中に静かに置く。部屋の四隅を安置の場所とし、東南の隅を第一、東北の隅を第二、西北の隅を第三、西南の隅を第四の場所とする。記憶の場は現実の空間のように意識して、明るさと広さのある静かなところとする。そうすれば、記憶すべきものがまぎれることなくいつまでもそこに置かれるという。イメージは生きたものでなければならないとし、「武」の字の場合、「戈」と「止」の組み合わせを、勇み立った勇士ともう一人の男が押さえつけて止めさせようとしている情景をつくる。イメージは奇抜な意表を突くもののほうが記憶に残りやすいので、「要」の字は、西方のトルコ系異民族の女を考え、西夏回回（ウイグル）の女子の画像を作り、「西」と「女」を組み合わせて

「要」とし東北の隅に安置する。「利」という漢字は、利益のほかに、鋭いという意味を持ち、農夫が鎌を取り、稲（禾）を刈っている画像を合わせて、「刀」と「禾」で「利」の字とし、西北の隅に置く。これは、リッチの漢字名、「利瑪竇」の第一字である。「好」の字の場合は、女が赤ん坊を抱いてあやしている画像を取り合わせて「好」の字とし西南の隅に安置する。

また、リッチは次のような考えを持っていた。画像の記憶については、はじめは難解で、混ざらないような配置はできないように思えるが、きちんととらえれば記憶の保存は確実で、画像の配置はうまくなれば、検索も簡単になる。重い荷物を運ぶことにたとえれば、自力で運ぶより車に乗せて引っ張ったほうが引っ張っていける。車の分だけ手間がかかり重くなるのではなく、楽に早く運べるように感じるのは、頼る対象があるからだと。

このように、リッチは漢字の六書（象形・指事・形声・会意・転注・仮借）に独自の解釈を加えて記憶画像を作り、イメージする場所に設置するのである。

4．現代の「場所法」と漢字教育

「場所法」は、現在、記憶力を競う世界記憶力選手権でほとんどの選手が使用し、世界的にも認められた記憶術である。記憶の「本質を突いた」「超定番の」「イメージを利用した王道の」方法であるとして紹介されている。具体的には、通学路や自宅、教室、デパートなど、見慣れた場所を置き場に設定し、そこに記憶対象を関連づけていく。たとえば、買い物リストやプレゼンのメモ、資格試験の頻出事項を、自宅の間取りや通勤路の風景、体の部位などに関連づけていく。買い物リストを自宅に関連付けて覚えるには、卵は玄関、酢は洗面所、豆腐は浴室という風に置いていく。その際、衝撃的なストーリーを想像すると強いイメージとして記憶に保持されやすい。こうした場所法の有効性は、現代の空間認識能力や脳科学のメカニズムの研究で証明されているという。

一方、漢字学習は現代の非漢字圏の日本語学習者にとって最も習得に時間のかかる困難なものとされている。漢字の辞書やテキストの題名に付与された「ストーリーで覚える」「つながる」「漢字イメージ・ネットワーク」という文言から何を重視しているのか想像できよう。学習者が漢字の形や意味、語彙体系を形成するにあたり、意味のネットワークやイメージを重視した認知学習法は広く受け入れられている。しかし、現在の漢字教育では「場所法」を用いて複数の漢字を一気に記憶するという学習法の紹介は管見の限り見当たらない。

リッチが漢文で伝えた西欧の記憶法については、中国では「使いこなすにはよほどの記憶術が必要だ」「中国人は記憶術については絶賛するが、使い方を学ぶ段になると積極的に取り組むわけではなかった」という記録もあるという。「場所法」を用いた漢字学習は、彼の後輩の宣教師には受け継がれたのか、中国人の記憶法に影響を与えたのか、漢字学習法の一つとして「場所法」の有効性を確認するには、各方面からの検証が必要であろう。

（おがわ・よしみ　横浜国立大学教授・博士＜政策・メディア＞）

■参考文献■

小川誉子美（2023）『開国前夜、日欧をつないだのは漢字だった—東西交流と漢字』ひつじ書房
J.D.スペンス（1995）古田島洋介（訳）『マッテオ・リッチ記憶の宮殿』平凡社
鶴ケ谷真一（2019）『記憶の箱舟—または読書の変容』白水社